概　要　報　告

| 実　施　期　日 | ８月５日（月） |
| --- | --- |
| 部　　会　　名 | 中学校　外国語部会 |

神奈川県研究主題

「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」

テーマ

**『コミュニケーションを取りながら「既習した文法・語彙を使って即興で身の回りのことを話す英語力」を身に付けることができる。』**

提案概要

学習指導要領の「話すこと〔やり取り〕」を身に付けるため、①新出文法の学び方を変えること②帯活動で英語を話す時間を確保し、間違いを気にせず話させることを研究仮説として立て、実践を行った。３学年共通の授業展開を実践し、即興でやり取りができるようになるまでの授業展開を紹介する。

【実践内容】

提案者の課題意識として、自身の幼少期の体験から英語のコミュニケーションの楽しさは従来の文法中心の教育では実際のコミュニケーション能力が育ちにくいと感じていた。そのため、生徒が身近に感じられ、主体的に取り組める授業改善を行い、生徒が即興で英語を話せるようになる授業を目指した。

具体的には、①新出文法の学び方を変えるということでは、１年生の教科書 UNIT 10 過去形の疑問文の活動を例に挙げ、生徒同士で「What did you do yesterday?」を話す練習を実施した。生徒はその活動の中で話した内容を記録し、教師がその後、添削するという形にした。また、毎授業では、②帯活動で英語を話す時間を確保し、間違いを気にせず話させるということを意識させるために、「イエローワークシート」という３つの質問が書かれた独自のスピーキングワークシートを用い、ペア活動を行った。その際、質問に対して繋がりのある英文で答えることも意識させ、さらにその内容を全体に発表させる時間も取り、それについて他の生徒が自由に質問する時間も作った。

この活動を３年間行うことで、「話すこと〔やり取り〕」の力が身に付いた３年生の授業を１年生が参観し、「先輩たちのように英語でコミュニケーションを取ることができるようになりたい」と意欲を持たせる機会を設けた。

【成果】

・生徒が間違いを恐れずに英語を話すようになった。
・英語を言葉として捉えるようになった。
・英語を話す時に繋がりのあるまとまった英文を意識するようになった。

【課題】

・間違いを正す機会が少なく、自然な英語習得には時間がかかる。
・書く能力が弱点になる。
・英会話とテスト問題のリンクが難しい。

質疑応答

Q)小学校と中学校の英語教育のギャップについて、特に小６と中１のギャップの乗り越え方について考えを聞きたい。

A)小：小学校では、スペルを覚えさせるような指導はしないことになっているが、中学校では、小学校で扱う 600、700 語は既習事項として教科書が始まっていることも知っている。個人的に、授業中に「これ、中学に行くと覚えなきゃいけないんだよね」と独り言のように言うようにしていると、余力がある子は覚えてもいいかもと言って取り組む児童がいる。

中：入学してくる生徒が、学校によって、クラスによって、また地域によって、単語を知っている生徒がいたり、いなかったりもするため、中学校では最初からやるという気持ちで、フォニックスをやりつつ、動詞を書かせていくということを中１で取り入れている。

協議の柱及び協議概要

『考えながら伝え合う力の育成』小学校「その場で」中学校「即興で」

協議をするにあたって、今回は同じ地区の小学校と中学校のグループになるようにした。その理由としては、同じ市町だと交流しやすいことや「小学校で何ができて、中学校では何ができるのか」を整理し、今後の授業改善に生かしていくためであった。

協議では、各グループの実践報告の共有、共通課題や重要事項の発見を中心に行った。あるグループでは、即興で話すための機会を多く作ることが重要、自分の考えを表現する力は英語だけではなく、全教科で育てていく必要があること、そして、人間関係が良好なクラスでは、伝え合う姿勢が活発であること等が挙げられた。また別のグループでは、安心できる学習環境の重要性が挙げられ、クラスの雰囲気作りが重要であること。その中で「言いたい」という気持ちを大切にすることが考えながら伝え合う力の育成に繋がるという発表があった。その他にも、インプットがあってのアウトプットであり、フレーズや文章を覚えることの重要性を感じているという報告もあった。

各グループには協議の内容を A3 ポスターにまとめてもらったが、その中には、小学校の制度の問題や中学校が抱える高校受験のジレンマなども書かれていた。

どのグループにも共通していたのは、生徒が自発的に意見を言える環境の整備、英語だけでなく、全教科での総合的な表現力の育成、そして授業の雰囲気作りやクラスの人間関係の強化が大前提として、必要であることだった。

まとめ概要

今回の提案は、即興で英語を話す力を養うために授業内容や方法を見直し、生徒の英会話能力向上を目指すものであった。具体的な実践例と成果、課題を含めて詳細に述べており、英語教育の新たなアプローチを示している。

助言者からは、質疑応答で出た小学校と中学校の英語教育のギャップについて、単語テストの改善提案、綴り間違いを減点しない方法の検討や中学校での引き継ぎと継続的な英語力の向上を目指していくことが述べられた。

学習指導要領では「話すこと」が二つの領域に分けられ、即興性が重視されている。実際のコミュニケーションでは、英語を瞬時に使える力が求められており、小学校、中学校とも共通して「即興で」考えながら伝え合う力の育成についての提案がなされた。その即興的な伝え合いの条件は以下の通りである。①メッセージや意味の伝達に焦点を当てること②簡単で馴染みのある話題を扱うこと③言い換えや聞き返しなどの臨機応変さを求めること④準備時間を取らず、継続的に練習すること。

これらを意識し、生徒にとって必然性のある話題を選び、日々の授業での積み重ねをしていくことで、段階的、長期的な視点を持った授業作りを行っていく必要がある。